

Title	印度支那の銅鼓に就て
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.4 (1933. 12) ,p.42(622)- 42(622)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

印度支那の銅鼓に就て

南支那や南洋にかけて發見せられる古銅鼓に就て西歐學者の注意が向けられたのは、十九世紀末であり、マイエル、フアイなどが東印度諸島發見の古銅鼓を紹介し、次いで支那學者ヒルトとホロートとの間に古銅鼓の起源に就て論争起り、また、ヘーゲル、つらいてバルマンチエの資料集成がなされたことは人の知る所である。然しながらかやうに起源の古い銅鼓問題はまだ少しも解決を見てゐない。最近佛領印度支那タノア（清化）地方ドンソンに於て青銅器時代の墳墓群發見され、その中より、銅鼓が發見され、ゴルーベフ氏は、その *l'Age du bronze au Tonkin et dans le Nord-Annam, par Victor Goloubew (B.E.F.E.O, XXIX, 1929)* に於て伴出物からその古墳年代を紀元一世紀頃となし、また銅鼓製作の動機を呪術的祭儀的目的にありとし、殊に葬儀との關係を強調されてをる。また一九三二年河内の先史學會議で講演された「銅鼓の起源及び流布に就て」*Sur l'origine et la diffusion des tambours métalliques, par V. Goloubew, (Communication présentée au Premier Congrès des Préhistoriens d'Extrême-Orient, le 30 janvier, 1932)* に於て氏は、銅鼓の模様と漢代青銅器の模様との類似を力説し、銅鼓の起源は、印度支那、北安南の沿岸とタノア、ホアピン山地地方なるも、支那より來りし工人の影響なりとなし、たゞその形式は、支那式ならず印度支那土人が鑿製の置臺の上に普通の平い太鼓を置いた原型に象り、銅鼓の形が生れたのであらうとし、今日ソンタイやホアピンのミューオン族にかゝる籐製置臺が使用せられてをることを紹介してをる。ゴ氏の説は、從來かつてなされざりし銅鼓原型に對する考察であり、銅鼓起源史に一道の光明を投じてをる。但し未だ自分としては銅鼓の起源を印度支那の一局部の考古學的人種學的事象で説明しざるは少しくあきたらぬ感がする。支那文獻方面よりの研究は、銅鼓が蠻族の間に一種の主權の表徴として用ひられしことを示すが、東京地方の文化事象が、支那南部在住の山地民に傳播した徑路は、かなり説明困難な問題である。支那文獻は、ヒルト、ホロートにより可成蒐集されてをるが未だ遺漏があるやうである。殊に安南文獻が未だ集められてゐないのは残念である。支那學者が此問題をも一度取扱つてよい時機である。（松本信廣）